

巻頭言

授業評価

— 21年前のドキドキ感、今も変わらず —

大阪河崎リハビリテーション大学 研究紀要委員長

佐竹 勝

前期の授業（期末試験）が終わり、併せて学生による教員の授業評価も実施された。結果とその内容が気になるのは、成績結果を待つ学生と同じである。

大学に「授業評価」が組織的に導入されたのは1988年の国際基督教大学と云われている。次いで1990年に多摩大学と慶応義塾大学、1993年には東海大学が全学導入するなどごく一部の大学で実施されているのみであった。文部科学省の調査によれば、授業評価を実施している大学は1992年の段階で523校中38校、わずか7.3%であった。やがて、国公立大学を中心に広がり、引きずられるように私立大がその数を増やし、1998年には50%を超えるに至った。その後、大学評価・学位授与機構や、文部科学大臣が認証した第三者による「大学認証評価機関」の認証評価を受けることが法令化されたこともあって、2004年には709校中691校と導入率も90%以上に達するなど、今やほとんどの大学で実施されている。授業評価の目的は、授業の実態を把握し、教員一人ひとりの授業改善に役立てることにある。つまり、教育や授業に活かされていくべきものであり、教員の教育力、授業力アップのツールとして学生の主観を聞くことは不可欠の要素となっている。

このように今ではどこの大学でも取り組んでいる授業評価であるが、筆者がこの授業評価に初めて出会ったのは25年前の1989年、カナダ留学のときである。詳細は忘れたが、授業の終わりに配布された用紙がそうであった。当時の日本にはまだ理学・作業療法士の4年制大学は無く、国立11大学の医療技術短期大学部が唯一の大学であった。この時代「授業評価」を目にすることも、耳にすることも、意識することもなかった。帰国後、教員としての適性に悩み、意を決し単独で「授業評価」を試みた。1993年のことである。寄せられたアンケート用紙を前に、ハラハラドキドキした経験は今でも記憶に新しい。その後、現在の職場に移り21年ぶりに学生からフィードバックを受けた。今回、当誌巻頭言の執筆を機に、当時と今の結果を見比べてみることにした。振り返りの資料として、20年前に寄稿したOTジャーナルへの一文を改変引用し、経過を振り返ってみた。

『リハ学院での教育に携わって10年が経過した。この間、教科書片手にただ一方的に「作業療法とは…」を押しつけ、多忙を理由に自分自身がやってきたことを振り返ってみる作業を怠ってきた。この度、担当した授業の区切りがついたのを機に、この10年の反省も踏まえ、思い切って学生に日頃の授業の勤務評定をしてもらった。評価用紙は、かつてお世話になったブリティッシュコロンビア大学で使用されていたものを拝借、一部改編し、必要項目を加えて作成した。内容は、「教具・教材の使用の適否」から「教員と学生のコミュニケーションの有無」など10項目。学生自身についても「予習復習に心がけた」など5項目を設け、

無記名のアンケート形式とした。普段ガミガミと口うるさくしている手前、この時ばかりは何気ない学生の視線が妙に気になり、落ち着かない一時であった。

結果は、なんとか及第点をもらうことができホッと安堵したものの、学生の眼は筋穴ではなかった。苦情が多かったのは講義の仕方、「口頭説明が多すぎる」「早口」「板書が少ない」というものであった。これではノートどころかメモすら取ることができない。そのあおりか、「授業への関心が湧かなかった」という回答が2割もあった。作業療法士になろうと決心して入学してきた人たちが、その専門科目において「興味が湧かなかった」とは大変なショックであり、一時落ち込んでしまった。「この10年何やっていたんだ…」と、机に手をついて猛反省である。うれしい手応えもあった。「最も有意義だったものは何か」の項目にはほぼ全員が「授業がActiveであった」と評してくれたこと、さらに「教員と学生の間にコミュニケーションが成り立っていたか」の項目では半数以上の学生がYesの回答を寄せてくれたことである。机に座らせっぱなし、聞かせっぱなしの授業だったらどんな評価だっただろうか…、と思うと冷や汗が出る。

学生自身の受講態度については、大半の学生が「ノートを取り、授業内容の理解把握に努めた」「欠席、遅刻、早退のないよう心がけた」としており、「分からないところは参考書で調べたり、質問するよう心がけた」が数名、「予習復習に心がけた」は皆無であり、消極的な受講態度も目立った。これはおそらく普段のカリキュラムの過密さもその原因と思われ、改めて編成見直しの材料となった…。』—以下中略—

本題に戻って、授業評価の結果であるが、及第点はいただけたものの、苦情は「ノートやメモが取りにくい」の指摘が断トツであった。原因は、スライドを中心とした授業構成に加えて、モニターが見えにくい…、にあった。板書も併用すればよかったと反省している。また学生からの「質問」や「予習・復習」は総じて消極的であり、今どきの学生気質が正直に出ている数値であった。結果は21年前の再現であり、同じ事を繰り返した問答無用の猛反省と相成った。授業の中では常に「患者から学ぶ」姿勢を強調しているが、改めて「学生から学ぶ」という基本を教えられた。「ハラハラドキドキ感」については、学生と顔を合わせることも用紙の配布回収もないのでホッとしているのが偽らざる心境。しかし届けられたデータを開封するときは21年前と同じで、一抹の不安と心拍数の増加となった。授業評価は、日頃の慢心を戒める意味においてもやってみるべきだと思っている。明日からはあれもこれもと欲張らず、的を絞り、基本の板書を工夫するなど意識して分かり易い授業に心掛けたい。ともあれ、教えることは自分自身も学ぶことだということがよく分かった。

参考・引用文献

- 1) 山地弘起編著：授業評価活用ハンドブック，玉川大学出版部，2012.
- 2) 佐竹 勝：かんとうげん. 作業療法ジャーナル, vol 28 No.5, 1994.